

8・15終戦記念日特集

# 戦争を知らない人たちへ

## 母だから妻だから 語り続けたい 命の尊さを

八月十五日は終戦記念日。いまから四十一  
年前に、日本が太平洋戦争で敗れた日です。  
毎年この時期になると、戦争で亡くなられ  
た方々の冥福を祈り二度と過ちをおかさない  
ようにと、全国戦没者追悼式を始め各地で多  
くの行事が開かれます。当時いろいろと苦労  
された方々にとっては、そのころの苦しかつ  
た記憶がよみがえってくる暑い季節でしょう。  
戦争を知らない若者が増え、苦難に満ちた  
体験が風化しつつある今日。今月号では、追  
悼と平和の祈りを込め遺族の二人の方に当時  
の体験談を、また、若い三人の方に平和への  
メッセージをそれぞれ語っていただきました。



市内本町4  
原田 ヤエさん (77歳)

二度と再び私が経験した  
ような苦労はさせたくあり  
ません。戦争は本当に嫌で  
す。戦争を知らない人たち  
に、私たちの体験を語り続  
けていかなければいけない  
と思いますね。

夫は職業軍人でした。昭和十三  
年に旭川の部隊から満州へ出征。  
ノモンハンで夫の同僚がほとんど  
戦死しました。  
その後、部隊は満州から台湾へ  
移動することになり、台湾へ向う  
輸送船が撃沈され死亡しました。  
昭和十九年三月、夫は四十二歳で  
した。結婚していっしょにいられ  
たのは、わずか二年余り。私は満  
州で悲報を受け、なすすべもなく  
本土へ帰還しました。

三人の子どもの手を引き知り合いの所  
へ。夜、無心に眠る子どもたちの寝顔を見  
ながら涙を流す毎日が続きました。

三人の子どもの手を引き知り合  
いの所へ身を寄せ、夜、無心に眠  
る子どもたちの寝顔を見ながら、  
涙を流す毎日が続きました。しか  
しいつしか、この子たちのために  
生きなければと、自分自身にムチ  
打っていました。  
幸いに、助産婦の資格を持って  
いましたので、食べることには余  
り苦労しないで済みました。でも、  
毎日生きていくのが精いっぱい  
でした。何といっても、子育てには  
苦労しました。片親だから  
とって片身の狭い思いを  
させないためにも、人一倍  
厳しく育ててきました。

ソ連に抑留されたらしいのですけど、  
それ以後、消息はありません。終戦の  
年の九月に最後の手紙を受取りました。

主人が戦死してから四十一年余  
り。昭和十六年十月、日の丸の旗  
に見送られ「子どもを頼む、しつ  
かり家を守ってくれ」と一言残し  
ていきました。

二十年十月ハバロフスクで武装  
解除、ソ連に抑留されたらしいの  
ですけど、それ以後、消息はあり  
ません。終戦の年の九月に最後の  
手紙を受取っただけです。  
遺骨も戻ってこないまま数年は  
主人の死を信じられませんでした。



市内幸町2  
大井 琴さん (69歳)

これからの余生は、なるべく子  
どもの負担にならないよう  
に、孫たちにとって、いい  
お婆ちゃんになりたいです  
ね。そして、私たちがたい遺  
族の悲しみを多くの人たち  
に知ってもらい、二度と同  
じ過ちをおかしてほしくあ  
りません。命はひとつしか  
ないのですから、命の尊さ  
を、若い人に叫び続けたい  
気持ちでいっぱいです。

いつかきつと帰ってくると思いな  
がら、子どもを育ててきました。  
浜にコンブ拾いにいたり、あち  
らこちらの飯場で、子どもを背負  
いながら住み込みで働きました。  
働いても働いても、つらい毎日  
でした。  
いま思うと、子どもがいたから  
こそ、一生けん命生きてこれたと  
思います。主人が見守っていてく  
れたんですね。